

現代における昭和時代についての意識（1）

——ある博物館の友の会会員を中心に——

立正大学社会調査実習室 青木久美子

1 目的

2000 年前後から継続している「昭和ノスタルジアブーム」は、主に昭和 30～40 年代を中心として、当時の文化、生活、風俗などが注目されたメディア文化現象である（日高 2014）。私たちの関心は、そのようにメディアを介した昭和イメージが流布する現代社会において、一過性のブームではなく、昭和時代にあったと思われる価値観や行動に範をとり自らの実践に結びつける「昭和ノスタルジア志向」と呼べるような動きがあることを確認し、その実態と形成プロセスを明らかにすることにある。

2 方法

2016 年より、都内の昭和 30 年代の家屋や家財道具が保存・公開されている私設博物館（1999 年開館）で調査を行っている。昨年度の日本社会学会大会で報告したように、この博物館は約 140 名のボランティア会員組織（友の会）を持ち、特色ある活動（祭り、昔ながらの家事の実践など）を継続している。これまで、中心メンバーへの聞き取り調査、郵送アンケート調査、会員向けの会報誌の分析を行った。本報告では主に郵送アンケート調査と会報誌の分析から、友の会会員の昭和時代についての意識や評価、友の会での活動内容や会報誌の役割について検討する。さらに、友の会のメンバーの中でも様々な志向性があることを聞き取り調査から明らかにする。

3 結果

アンケート調査（回収率 74%）の結果、友の会会員は古い時代のものに魅力を感じる割合が高く、骨董品やレトログッズを集めている割合も高かった。また、手ぬぐいや風呂敷を使う、漬物を漬けるといった行為を日常的にしている人が半数前後を占め、昭和の暮らしに対する評価は高い。ただし、高年層の方が中年層以下よりも「どちらともいえない」と答えた割合が高かったことから、昭和 30 年代の実体験があるからこそニュートラルな評価をすることが見て取れた。聞き取り調査からは、友の会のメンバーの中でもコレクター的関心、研究者的関心、コミュニティ的関心といった多様な方向性があることが明らかになった。そうした人びとを緩やかに結びつける場所として博物館の空間と様々なイベントが機能している。

4 結論

友の会会員は全体として昭和時代への関心が高く、とりわけこの博物館のテーマになっている「暮らし」への評価は高い。昭和 30 年代の暮らしが「丸ごと保存」されている博物館を訪れることは、実体験に基づく懐かしさや、「祖父母の家のように」で懐かしいという感情を喚起するきっかけとなる。さらに友の会に入会し、同じような趣味、志向の人々と交流し、様々なイベントを体験することで、友の会会員における「昭和ノスタルジア志向」は醸成され維持されていく。調査の結果からは、このようなプロセスを想定することができる。

参考文献

日高勝之, 2014, 『昭和ノスタルジアとは何か——記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学』世界思想社。